

## 関心を持った きっかけ

日本では教育といえば学校という連想になりますが、私が所属する教育学研究科生涯学習基盤経営コースは、広い意味での教育制度の解明に取り組んでいます。そのひとつとして情報基盤としての公共図書館について、また近年は学校図書館と教育の問題に関心を持って研究してきました。学校図書館が学校カリキュラムと連動し、学習情報センターとして機能するためには、どのような施策が行われるべきかについてです。非常に難しい問題ではありますけれども。

「図書館を使った調べる学習」は、小・中学校における夏休みの「自由研究」や「総合的な学習」の一環として行われることが多くあります。「自由研究」は、現在は学校カリキュラムの中では周辺のなことに位置づけられていますが、占領期から戦後初期の学習指導要領を見ると、かなり重要視された学習方法であったことがわかります。「総合的な学習」は学力低下の原因のひとつであるかのような批判を受けましたが、私はそれは間違っていたと考えています。文部科学省も、2011年度完全実施の学習指導要領において「習得型」「活用型」「探究型」の3つの学習方法のバランスを求めようになり、またPISA（OECD生徒の学習到達度調査）の結果を踏まえた知識活用を前提とした「言語力育成」の重

視も見られるなか、内容を充実させる方向に進んでいます。

こういった「総合的な学習」や「自由研究」と深い関わりのある「図書館を使った調べる学習」とそれを広めようとするこのコンクールが、子どもたちの自主的な学びを支援する学校図書館整備のためどのように機能しどのような効果をあげてきているのか、こうしたことを明らかにするため、2009年度秋から2010年度秋まで、1年間調査を行いました。

## 調査で わかったこと

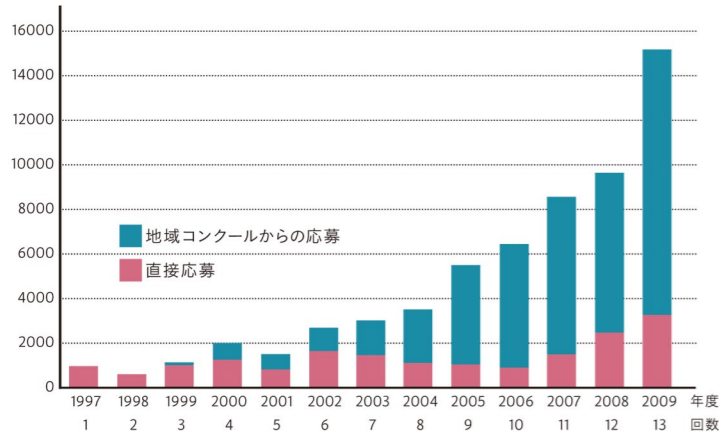
まずは図書館の学校事務局で、これまでのコンクールの経緯や運営について聞き取り調査を行いました。順調に応募者数を増やしていますが、増加数の多くは各地の地域コンクールによって支えられている、という現状がわかりました。（下のグラフを参照ください）

また、次の3つの課題を計画しました。

- 受賞作品の分析（浅石卓真担当）
- 受賞者へのアンケート調査（井田浩之担当）
- 地域コンクールの事例（金昭英担当）

ちょうど私の研究室に所属する大学院の3人の学生が、それぞれ研究テーマに近い研究関心を持っていましたので、分担して取り組むこととしました。

図書館を使った調べる学習コンクール応募作品数



根本彰 ねもとあきら

東京大学大学院教育学研究科教授。  
著書に『情報基盤としての図書館』  
『文献世界の構造』など。



東京大学大学院  
教育学研究科教授  
根本彰先生に  
聞きました

取材・文＝  
山田万知代(編集部)

# 図書館を使った 調べる学習コンクール その効果について 総合的に評価する

2009年度冬に第13回の審査会を見学し審査委員への聞き取り調査を行ったほか、各自の調査を進めました。

### ●受賞作品分析

受賞作品分析では、コンクール第8回(2004年)から第12回(2008年)の受賞作品を対象として、テーマ、構成、参考資料、の3つの観点から分析を行いました。その結果は調査報告から引用すれば次のようになります。

- 「小学生の部」では作品の制作を通じて
- ①身の回りの現象に対して「疑問」を持ち、それを問いとして発信する能力
  - ②文献だけでなく、実験・体験やインタビュー調査を含めた様々な方法を組み合わせるアプローチする能力
  - ③調べるための基本的な手段として、図書やインターネットを活用する能力
- 「中学生の部」では新たに、
- ①メディアや過去の経験から、解決すべき課題を見つけて定式化する能力
  - ②文献調査やインタビュー調査、体験活動で調べたことを根拠として、課題に対する解決策を提示する能力
  - ③必要に応じて、図書と電子資料以外の多様な資料を選択して調べる能力
- 「高校生の部」では、
- ①テーマとして調べる範囲を十分に絞り込む能力

- ②絞り込んだテーマに応じて、より妥当な調査方法を選択する能力
- ③信頼性に応じてメディアを取捨選択して活用する能力

が得られることが期待される。(調査報告より)

総じて、自発的な学ぶ意欲や論理的な表現能力、また、情報を選択したり探索したりする能力といった学校における通常の授業で得られるような学力とは異なった力を育成する場になっているということがわかります。

### ●受賞者へのアンケート調査

受賞者へのアンケート調査では、作品をまとめるまでのプロセスと受賞者自身が感じている効果を明らかにする目的で、第1回(1997年)から第12回(2008年)の受賞者を対象に、2010年1月から2月にかけて質問紙法(郵送法)で調査を行いました。この期間の受賞者は416名、うち2010年時点で中学生以上の方(住所不明者等除く)180件に配布、そのうち99件を回収しました。結果を報告書から引用すると次のようになります。

受験に対する効果を感じている回答者は中学生、高校生で書いた人の過半数にのぼった。自由記述欄の分析では文章を書く力や論理的な思考、粘り強さ、また学ぶことの動機付けなどの効果が指摘されている。

テーマをその後も継続して調べつづけたと回答している人は小学校で取り組んだ人の4割、中学校で取り組んだ人の6割おり、また、

執筆経験がその後の進路選択に影響を与えたと報告している回答者もいる。

現在社会人になっている人の8割が何らかの効果を感じると報告しており、書いたりまとめたりする力や粘り強さなどが具体的に指摘されている。(調査報告より)

つまり受賞者があとから振り返って、作品を制作しそれが受賞したことが後にさまざまなよい影響を与えたと考えているということ。教科の学力との関係についても調べてみましたが、書いたことが一定のプラスの効果をもったと考えている人も少なからずありました。ただし、これらの効果は作品を制作したこと自体の効果なのか、それが全国コンクールで高い評価を受けたことも含めての効果なのかについて判断することは難しいと感じています。

### ●地域コンクールの事例

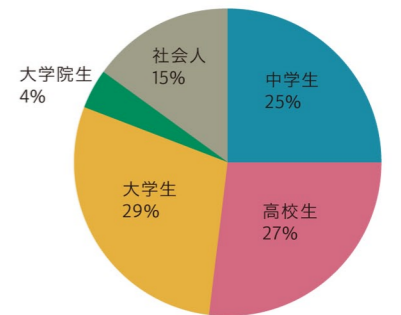
地域コンクールの事例として、千葉県袖ヶ浦市を対象として調査しました。

袖ヶ浦市は、早い時期から地域コンクールを実施した地域です。文科省の学校図書館情報化・活性化推進モデル地域事業を行った地域のひとつであり、何年か前に私も研究会に参加したことがありました。いろいろと図書館施策をされていることに感心しましたが、そのときは、ほかの地域と比較する方法が浮かびませんでした。しかし、今回このコンクールの受賞者一覧を見て、たくさんの受賞者を毎年輩出していることに驚き、その秘密が

どこにあるのかを探ろうと何度か視察しました。

袖ヶ浦市が成功した要因は、教育委員会主導で学校図書館を支援していること、準備過程(資料費の確保、学校司書の全校配置、学校間の物流システム)がしっかりしていた、ということ。全国的にみても学校図書館の職員(学校司書)を組織的に配置し、それも全校に常駐させるという地域はなかなか増えていきません。それが、袖ヶ浦市はまず人の配置を行いました。資料の物流システムも、各学校と学校図書館支援センターを結ぶだけでなく公共図書館、博物館にもつながっています。ただ、そこまでは他にも先進例はあるのですが、袖ヶ浦市が優れているのは、それらのインフラを整えた上で、その先を考えたことでした。学校図書館に何ができるか、学校の教育課程との関わりを考えてシステムを整えようとした。その上でこれを推進するために採用した方法が地域コンクール開催だったのです。さらに、コンクールにあわせて夏休み中に学校図書館を開館したり、調べ学習相談会を市立図書館で開催したりしています。この調べ学習相談会というのは、図書館関係者や教育関係者だけでなく、企業で技術開発にあたる人やお医者さんなど、子どもたちが関心を持つテーマの専門家が図書館に来て、子どもと親の調べる学習の相談にのる取り組みです。さらに、成果の発表会も地域で行っています。個別に調査した蔵波中学校では、学校内で学年別、クラス別に発表会をする取り組みを始めています。

回答者の現在

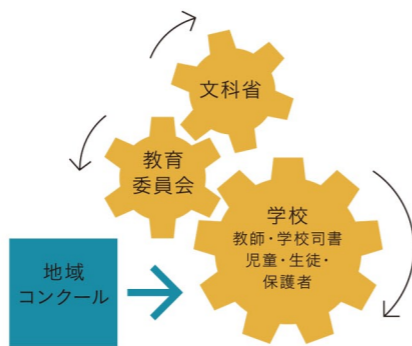


作品執筆後の効果(小中学生)

得意になった教科	スキル面	社会、理科のテーマ選択者: テーマ+得意になった教科
小学生 社会科系、理科系	文章を書く	社会:社会系+国語 理科:理科系+国語
中学生 社会科系、国語	本を読む 図書館の利用	社会:社会系+国語
高校生 社会科系、国語		社会:社会系+国語

- 小学生は社会+理科系、中学生、高校生は社会系+国語系に対する効果。
- スキル面:「文章を書く」「本を読む」「図書館の利用」は科目に関係なく効果がある。  
→「人前での発表」に対する効果だけが感じられない。  
日本の教育事情と関連しているのでは?
- 「国語」を通して得られる、「資料、情報を」「読む力」、「書く力」は幅広く効果として感じられる。

袖ヶ浦市の調べる学習をめぐる  
関連集団と地域コンクールの関係



新学習指導要領のポイント(中央教育審議会)

- 1) 「生きる力」という理念の共有
  - 2) 基礎的・基本的な知識・技能の習得
  - 3) 思考力・判断力・表現力等の育成
  - 4) 確かな学力を確立するのに必要な授業時数の確保
  - 5) 学習意欲の向上や学習習慣の確立
  - 6) 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実
- 2)を基盤とした3)、5)、6)が重要

このように、袖ヶ浦市は地域をあげて学習機会の支援を行っています。学習者ひとりひとりへの対応も、地域でなら可能な部分があることがわかりました。また夏休みに子どもたちが行う自由研究を家族や地域の人々が皆で応援するという雰囲気があることも感じました。こうしたことが、袖ヶ浦がこのコンクールにおいてすぐれた作品をたくさん送り出すことができている秘訣ではないかと思えます。

## 学力との関係

先にも触れましたが、1年間研究を行うなかで調べる学習と学力との関係について常に意識していました。というのは、調べる学習が通常の学習とは別の目的のために行われ、あまり役に立たないと思われがちからです。学力との関係というと、一般的に受験の効果を考える方が多いと思います。受験の効果というと東京大学をはじめとした難関大学の合格率で表されることが多いのですが、東京大学というのは、もともと官僚養成のための学校なので、物事を短時間に正確に処理する能力を評価します。それもひとつの能力ですが、それだけが能力ではありません。

このコンクールは、知りたいテーマを自分で設定して徹底的に考え、表現する、という能力を見るものです。それだけでは受験との関係を調査するのは難しいと言えます。また、開催からまだ十数

年ですから、数値に表されない部分もあります。しかし、調べる学習と学力は、無関係ではない、と私は思っています。自分で調べて論理的な文章を書くということは、言語能力を養います。短い文章を書くときに要求される適切な言葉遣いや表現力に加えて、このように長い文章を書くときには論理的な構成力が必要となります。これはなかなか難しく大学生や大学院生が論文を書くときに困難を感じる人も少なくありません。先にお話ししたようにコンクールの受賞者も効果があったとおっしゃっていたわけですが、それはこうした困難な課題を自分で達成することができたことから生まれる自信によるものでしょう。

今次の学習指導要領では、教室内のみならずあらゆる場面で学習の場であり、子ども自身が学び、他者と知識を交換し、それを発表、表現するプロセス全体を重視しています。主体的に獲得した「知」を活かしていく生涯学習社会は1990年代からの課題でしたが、ようやくそれを実現するための具体的な展望が開けてきたといえます。知識基盤社会を支える重要な要素としての学校図書館および公共図書館の役割もそこから導きだされます。

## 探究型学習の動機付け

このコンクールは、「図書館を使った調べる学習」を学習課題として明示したことにより、子どもた

## 「図書館を使った調べる学習」効果と課題

### 効果

- 1 「受賞作品は本コンクールへの参加を通じて、少なくとも(1)テーマ設定力、(2)論の構成力、(3)資料活用能力、の3つの能力が、各学校段階に応じたレベルで身につけられていることが示唆された」(調査報告書、受賞作品の分析 浅石卓真氏報告より)
- 2 「コンクールの受賞者は、自分自身の興味や関心を発展させ、その中で図書館利用や様々な調査方法を用いることでスキルの能力を獲得し、また、様々な情報を用いることで読解力や書く力を伸ばすことができたと感じている。効果的に情報リテラシー能力を身につけていたと言える」(調査報告書、受賞者へのアンケート調査 井田浩之氏報告より)

- 3 「コンクールは主体的な学習と言語的表現力のような学力を身につけさせるのにより機会を提供している。そのような学力を評価する場として重要である」
- 4 「コンクールはこれまであまり自覚されていなかった探究型学習の意義を顕示化する効果がある」

### 課題

- 1: 学校カリキュラム上の位置づけを明示する  
先進的な指導体制をもつ学校・地域のやり方を明らかにし、普及させる。
- 2: 探究型学習の方法を明示  
文献やネット上の情報を評価しながら新しい知を獲得する「調べる学習」だが、テーマ設定や論構成のためにはそれ以前の教科学習や総合的な学習の過程との関係を無視できない。また文献だけではなく、観察、実験、聞き取り調査などを行うことが必要。これらを一連の学習プロセスとしてとらえ、個々の具体的方法を明らかにしていく。
- 3: 資料や情報の引用方法の明示  
文献やネット上の情報を使う際、著作権法の規定や学術的な慣例に基づいて文献や情報を適切に引用する指導が必要。
- 4: 啓発活動  
ガイドブック刊行、研修会の開催、機関誌『あうる』やホームページによる広報。
- 5: 地域コンクールを強化  
地域コンクールは、個々の学習者の作品を良く見て評価をフィードバックしやすい。教育的な場として非常に重要な場となりうる。地域内、学校内の作品の展示や発表会の開催を通してこうした教育過程が次の年度にも引き継がれていく。

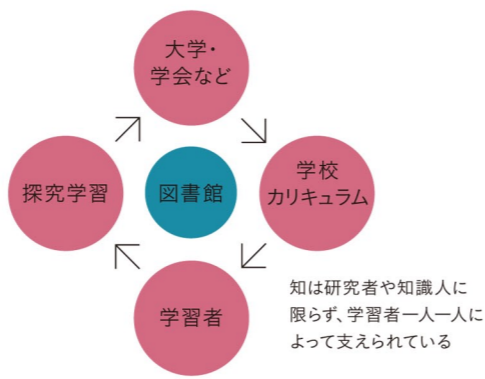
ち、そして教育者にとっても探究型学習を進めることの動機付けとなりました。

「主体的な学習」と「言語的表現力」を重視するこれからの学習指導要領から見ると、このコンクールはそうした学力を身につけさせるのにより機会を提供しており、今後、学力を評価する上で重要となると私は考えます。さらにこのコンクールは、これまであまり自覚されていなかった探究型学習の意義を顕示化する効果をもっています。

また、今回コンクールを調査したことで、学校図書館の重要性が改めて明らかになりました。学校図書館は、単に学習課程に適切な資料を提供する役割をもつ場だけではなく、そこに常駐する職員は、ネット上や学校外の学習資源も含め、調べるための学習資源についての知識や検索技術を持ち、子どもたちのテーマ選択や作品における議論展開についてのアドバイスをを行うだけでなく、教員に対しても調べる学習における積極的協力や教材作成のアドバイスをを行う必要があります。

こうした専門知識をもった職員の養成と配置は大きな課題です。これはコンクール以前の問題ですけれども、コンクールの実施を通じてこの課題の解決に貢献できる部分が多々あると思われるから、今後も継続して調査し、学校図書館との関係についても理論化していきたいと考えています。

## 学術的な貢献と知の循環



この研究は2010年11月、「第12回図書館総合フォーラム」において中間報告が発表されました。その時点での資料は、Web図書館の学校で公開しています。  
<http://www.toshokan.or.jp/>  
この記事の図版は中間報告資料をもとに世ノ一善生が作成しました。

今後、2011年5月に日本図書館情報学会で、また6月にマレーシアで開催されるアジア太平洋図書館・情報教育国際会議(A-LIEP)で発表予定、さらに書籍として岩崎書店から刊行予定です。